

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。
広報の内山岳志さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。



◆ 感染症マニユアル ◆

痘瘡は器量定め、
麻疹は命定め

子育ては毎日が心配事の連続ですが、なかでも心配なのは子どもの病気でしよう。高度な医療が普及していない江戸時代には、10歳までに約3割の子どもが亡くなったとも言われています。なかでも麻疹や痘瘡(天然痘)といった伝染病は命の危険を伴い、江戸の人々に恐れられていました。

今回ご紹介する浮世絵は麻疹絵と呼ばれるもの。麻疹除けのおまじないから過去の流行年、療養中の食べ物の禁忌、病中・病後の過ごし方など、麻疹や痘瘡に関する情報が、細かい文字で書き込まれています。

頬に赤い発疹が残る二人の子どもは無事に高熱を乗り越えたのでしょうか。表情は明るく、回り灯籠を楽しんでいるようです。

子どもが命の危険を伴う病気に罹患したとなれば、見守る親の緊張感は相当なものだったはず。そんなとき、このような病後の穏やかな光景を目にすることで、人々は快癒への希望を持つことができたのでしょうか。そして「そんなときこそリラックスを」という養生の心得に、江戸の人々の優しさを垣間見るような思いがするのです。

「麻疹養生伝」

歌川貞秀
文久2 (1862) 年

絵師の歌川貞秀は初代国貞(三代目豊国)の門人。本作は文政7(1824)年に重田貞一(十返舎一九の変名)が著した同タイトルの書籍に書かれた内容をもとに制作されたもの。文久2年は麻疹の大流行により全国各地で多くの死者を出した年で、このような「麻疹絵」が数多くつくられたことが知られている。麻疹絵のモチーフは本作のような回復期の人の姿を描いたもの他に、麻疹をもたらすとされた麻疹神が退治される絵柄や、中国で疫病を払う神として信仰された鍾馗を描いたものなど様々だ。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note

江戸ミニ知識

麻疹の流行で年齢がばれる!?

子どものうちにワクチン*接種をする私たちと違い、江戸時代の人々は前回の流行以降に生まれた人であれば、大人であっても麻疹に罹患する恐れがありました。今作中に過去の流行年が記載されているのはその注意のためです。江戸の川柳には「前回の流行を経験していて、今回麻疹にかからなかったら、サバを読んだ年齢がバレちゃった」なんていうものも。これは一大事!?

*MR(麻疹風しん混合) ワクチンのこと